

愛のような日々

岳真也

青娥書房

愛のような日々

岳 真也

一九七四年九月一日 第一刷発行

発行者 ● 加清 蘭

発行所 ● 青娥書房

東京都千代田区三崎町3-1-11 H101
電話(264)2023 振替東京21400

印刷所 ● 壮光舎印刷株式会社

1092-11042-3972

検印廃止

目次

愛のような日々 5

昨日に吹く風 95

あたしの夏 187

迷いみち 219

装幀
道吉
五島三子男
剛

愛の
ような
日々

確實なものは何もない。昨日も今日もそして明日も、ただ茫漠としたもやの中にかすんでしまっている、そんなのつべりした時代だからこそ、なおさら確からしきものを渴望する。そう、まさしくぼくらは逆説の世代なのだ。ぼくがこの小説集を通して、すでに文学上のテーマとしては手垢に塗れ、色褪せて行こうとしている《愛》をことさらに追い求め、ぼくらなりの《青春》の態様を証してみたかったのも、そうした一種の世代感覚に基づく。つまり、ぼくは風化し、白茶けた地平の向こうから、かえって逆に明確な生のかたちが、ひとすじの光りが刺しこんでくることを反語的にねがったのである。

愛の
よう
な
日々

真紗子がとつぜん、私を愛しているか、と訊ねかけてきたとき、自分は、いいや、たぶん愛してはいないだろう、と答えた。あまりに唐突な問いかけであつたにも拘らず、自分は前もって用意してあつたかのように、即座にそして素っ気なくそう言つたのだつた。

遅い朝の光がくすんだ象牙いろのカーテンの隙間から刺しこみ、まだ寢床のかたづいていない自分の狭い三畳の下宿部屋を仄白く染めていた。戸外からは喧しい子供たちの遊び声が聞こえてき、窓辺に置かれた小さなステレオから流れてくる《聖母の宝石》の美しい旋律をかき乱していた。自分は、ドアのてまえに呆然と立ちつくしている真紗子の肩に手を置いて、そのまま黙って抱きしめようとした。だが、彼女はそれの丸く小さな肩を激しく揺すって、それを拒んだ。それから、伏せていた顔をゆっくりとあげると、赤く充血した眼差でじっと自分の眼を見つめた。自分はすぐに彼女の視線をそらし、足もとの畳にできた黒い痣のような煙草の焦げ跡

のほうに意識を集中させた。そうして、自分は真紗子の痛々しい睥睨ひきようと、暫時さんじのおもくるしい沈黙に耐えていた。

やがて、真紗子は出て行った。何も言わず、別れの言葉さえも告げずに、静かにドアを開け、去って行ったのだった。彼女の足音が跡絶えると同時に、子供たちの賑やかなくったくのない笑い声が、急に自分の耳のまぢかに響いてきた。前日から降りつづいた時雨しぐれもあがり、打って変わった秋晴れの、穏やかな日曜日のことだった。……

それで終りだった。自分と真紗子との日々——愛に似て、愛ではない、愛のような日々は、ちようどまだかたちの整わない青く苦い林檎の実が風もないのに梢から零れ落ちるようにして、終ったのだった。

そのころ、自分は無職だった。失職中というわけではない。もともと何らかの職業に就いていたのではないから、《失う》という言葉は当たらないのだ。大学を出てから一年近く、自分はほとんど何もしないで、ぶらぶらしていたのである。在学中も、学年末に集中的に行なわれる進級試験のとき以外は滅多に顔を出さない、きわめて不真面目な学生であったから、その延長

上にある生活をおくっていたといっても良い。求職難の時代ではなく、自分のいた大学は、世間的にはかなり名の通った私立大学、しかも自分は経済学部に着を置いていたから、高望みさえしなければ簡単に職を得ることができたはずであった。しかし、自分は学友たちがより条件の良い会社に入ろうと催促^{あくせ}している季節にも、あいかわらず悠々とした放埒^{ほうちやう}な毎日をおくっていたし、それは卒業してからもまったく変わらなかった。かといって、一生遊んで暮らせるほど恵まれた星の下に生まれたというわけでもない。自分の家は、九州の小さな地方都市でクリーニング屋を営んでいる。父はすでに亡く、後を継いだ自分より七つも年上の兄が、数人の使用人を雇って、母や義姉と共にその店の一切をとりしきり、自分とまだ高校生の妹の学費を賄^もってくれていた。父の突然の死によって、兄は大学進学を諦め、家業を継いだ。そして大都会を闊歩するエリート・ビジネスマンになりたいというかつての希みを自分に託した格好になっていたのである。だが、兄は彼の希望をなかば裏切りかけている自分に対して、何もうるさいことを言おうとはしなかった。「おまえは、おまえのやりたいようにやってゆけば良い」というのが兄の口癖で、死んだ父の遺言通り、自分が二十五歳になるまでは、毎月きちんと仕送りをしてくれる約束になっていた。自分とは違って、万事に几帳面な兄は、五年前からまったく滞りなく、月末になると必ず額面三万円の小切手を書留で送ってよこした。三万円という金額は、様々な誘惑に満ちた大都会で生活する若者にとって、けっして十分な額ではなかった

が、それでも贅沢さえしなければ、何とか暮らしてゆけた。

つまりところ、自分は早晚どこかに職をみつ、身を置く場所を探さなければならない、いわば、執行猶予の状態にあったのだ。が、ふだんはむろん、将来のことなど些かも考えようとはせず、月々六千円の家賃を払って三疊一ト間の下宿を借り、気ままな生活をおくっていた。

一時自分は万引きに凝ったことがあって、そのとき集めた、というより何となくたまってしまった本を、夜になるとかたっぱしから読みあさった。自分の部屋は、二階のいちばん東端にあったから、朝陽が昇りはじめるのが判る。薄明のなかに光の粒子がはじけだし、天井裏に巢でもあるのだろう、雀の啼き声が聞こえてくる……その時分になって、ようやく自分は眠気の訪れを感じ、読みかけの本を枕もとに投げ捨てて、床に就くのだった。

めざめは決まって夕方で、寝呆けまなこのまま蒲団からぬけだすと、起ちあがるついでに、ずいぶん前に手に入れた中古の電熱器のコンセントを差しこむ。そして、長いこと取り換えていない水の入った薬罐で湯を沸かし、インスタントのコオヒーをブラックで飲む。たまには、コオヒーをすすりながら、音楽を聞くこともある。狭苦しい部屋の片隅に置かれた唯一の贅沢品、FM放送も聞ける仕組みになっているラジオ付きステレオのスイッチを捻るのだ。高校時代はクラシックとモダン・ジャズしか聞く気がしなかったが、いつしかポピュラー・ソングにも耳をかたむけるようになっていた。……それから、おもむろに着更えをして、街にをかけて

行くのだ。着古した、よれよれのジーン・パンツのポケットに小銭をちらつかせながら。行先は、たいがい盛り場のパチンコ屋かスマート・ボール。ときには、大学時代の友人たちを誘ったり、誘われたりして、雀荘に赴くこともあった。勝って思わぬ大枚を手にしたときには、お気に入りの女のコがいるバーを訪れる。前には、よく街なかで声をかけて、同伴喫茶などに初心な娘を誘いこんだりしたものだが、それに飽きたのか、あるいはいくらか年をとったせいか、しだいに面倒なことを好まなくなった。玄人女のほうが、よけいなことに氣を使わなくてすむし、何よりも話が早くて良い、と思いはじめたのである。――

とにかく、自分はそんな生活をしていたのだった。他人に何と言われようと、たとえ自堕落だと蔑まれようと、かまひやしなかった。自分はそれに十分満足していた――いや満足しているはずだったのだ。それが、ある日、まったくとつぜんに狂いだした。面倒臭いことを、ことに人間関係において、煩わしいことを一切避け、忌み嫌っていた自分が、こともあろうに恋をしてしまったのである。完璧なまでに放恣の甲冑でよろっていたはずの自分の心にも、やはり小さな穴があいていたのだろうか……自分でも気づかなかった心の綻びのなかに、真紗子は真冬の底意地の悪い隙間風のように入りこんできてしまったのだ。あるいは、彼女は凍てついた木枯に運ばれて自分の胸のどこか病んだ部分に忍びこんできた毒虫みたいなものだったのかも知れない。自分は、みるみる自分の胸に蔓延してゆくその猛毒をどうすることもできなかった

た。そうして、ふと気づいたとき、初めはその存在すらも定かではなかった心の間隙が、すでに埋めるべきすべもないほどにも大きく黒ぐろとした空洞と化していたのだった。しかも、そのときには、もう自分の胸から、毒虫は、いや、真紗子の姿は消え失せてしまっていた。彼女は自分の胸のなかを悉く喰い荒らした揚句、自分一人この地上に残して、彼方の空に向けて飛び翔けて行ったのだった。

恋をあたたかい温りの花畑に息吐く雛罌粟ひなずしでもあるかのように言うのは、ちょうど青春が美しい奔放の季節であると嘯くのと同様、まっかな嘘だ。少なくとも、青春を《地獄の季節》のように感じる者にとっては、恋とは荒涼とした雪原にしろうじて咲いている薄汚れた名もない花以外の何ものでもない。ひとたびふふけば、すぐにも吹きとばされ、雪のなかに埋もれてしまふ短命の花。……自分と真紗子との《出来事》も、そんな類のものだった。すぐに忘れてしまえるはずのことだったのだ。しかし………………。

自分が真紗子と知り合ったのは、まったく偶然のことからだった。

五月の初め、自分が大学を卒業して二カ月目のある朝のことである。自分はいつもと同じように、たいして面白くもない本に読み飽きて、夜明けの訪れとともに眠りに就くつもりだっ

た。だが、どうしたわけか、その朝に限って、眠気がいっこうにやってこない。寢床にもぐりこみ、掛け布を頭から被って、羊が一匹二匹……と地平線の彼方に消えて行く情景を思い浮かべてみたりもしたが、そのまじないの効き目も顯れず、かえって冴えてしまふばかりだった。牛乳配達のカタカタと瓶がぶつかり合う音や、朝早く出勤する勤め人のかすかな足音はもとより、いつもは少しも気にならない雀の啼き声までが耳につき、自分の眠りを妨げた。それでも、いくらかはウトウトしたのだろうか、思ったよりも時間は経っていて、どうしても深い眠りに入ることができないと見切りをつけ、蒲団をはねのけて起きあがったときには、すでに部屋中明るくなっていた。

自分の部屋は、東側と南側の両面に窓があり、よほどのときでもない限り、雨戸など閉めようとも思わないから、カーテンの破れ目を通して夥しい光が放逸に刺しこんでくる。光線と光線とがぶつかり合い、ふだんは眼に見えない微粒の埃を競うようにして空中に浮きあがらせている。自分は、それらの光の束を遮り、減茶苦茶にかき乱しはじめた。すると、それまでの不眠に対する苛立ちがバカバカしく思われるほどに、愉快な気持ちになった。他人がもしその場を見たら、自分の気が違ったのではないか、と疑っただろう。自分は、ぶつぶつと経を読むようにしてロックの節を呟きながら、両手両足を交互に振りあげて踊りつづけ、かなり長いあいだ五月の朝の陽光と戯れていたのである。

じっさい、その朝の自分は奇妙だった。胸の内側をねこじらしの穂みたいなもので擦られてでもいるかのように、浮かれ立ち、平素はほとんどたんだことのない万年床をきちんと押入れのなかにしまいこんだり、坐り机やステレオのまわりをかたづけたりまでしたのである。まるで、長い旅にでかける朝のような気分だった。部屋のあちこちに散らばっていた本をかき集めて、枕の上に積みあげると、いつもは窮屈な自分の部屋が、急に広くなったような気がした。

やがて、口腔いっぱいに苦みのひろがる砂糖ぬきの濃いコオヒーを飲み終えると、

「ごっそさん」誰がいるわけでもないのに、陽気にそう呟いて、自分は勢いよく立ちあがった。そして、義姉がついこのあいだ送ってくれた手編みのカーデガンを手に取ると、そのまま部屋を出た。

口笛を吹きながら、階段を降りる途中で、階下に住んでいる下宿の叔母さんと出逢わした。彼女はちょうど外からドアを開けて、階段の下の三和土^{たき}に足を踏み入れたところだった。

「おやッ、田所さん」と頓狂な声をだして、叔母さんは度の強い眼鏡の下の眼を丸くさせた。

「やア、叔母さん。おはようございます」

「どうしたのよ、こんなに早く……何かあったの？ 何が起こったのよ？」

彼女は自分の挨拶に応えようともしせず、やつぎばやにそう訊ねかけてきた。自分は、そんな彼女の善良な人柄をさらけだした慌てぶりが可笑しくなっていて、あやうく吹き出してしまいそう